短歌

孫『優太』

菊地美絵

葉桜の下に肩寄せ
　土筆摘む優太三歳おしゃべり続く

今日からは小さき箸も加はりて
　ミッキーマウスの模様が踊る

半分っこの月だよばあさん見てごらん
　優太の感性われを揺さぶる

始めての運動会にお遊戯する
　優太の瞳もリズムに揺れる

二十一世紀に向ひはばたく孫優太
　今日も爽やか朝の挨拶

短歌

早春

白川哲子

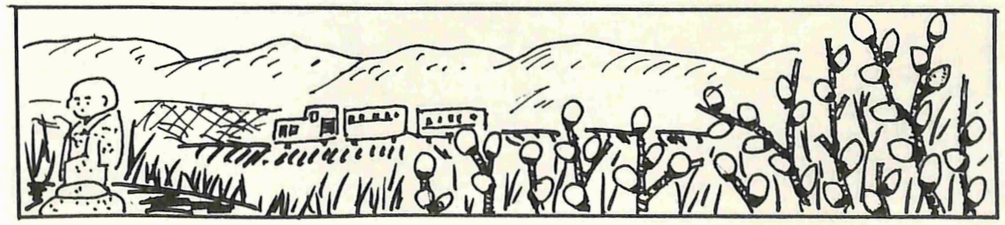
減反を余儀なくされて不服なり
　米輸入の報に苛立つ覚ゆ

厳寒に水道破裂し老い夫は
　部品交換見ん事修理す

三人の子残し不倫の家出妻
　新聞記事にわれ激怒す

答案紙百点なるにさりげなく
　卓の上に置きし孫が愛しも

早春の田面に輪となり白鳥ら
　北帰行の時を待ちしか



短歌

入穀（イゴク）の穴

花田柾五郎

明日開かむさまにふくらむ梅が枝に
　名残りの雪は惜しみなく積む

池の辺に夜ごと夜ごとに鳴く蛙
　今宵は鳴かず異変の兆しか

天明の飢饉に倒れし村人を
　葬りたりとふ入穀（イゴク）の穴は

このあたり太宰散策小径とふ
　登仙岬は今し桜桃忌祭

過ぎし日に友と遊びし川の辺に
　今宵ははつか蛍飛び交ふ

短歌

遠花火

原田喜一郎

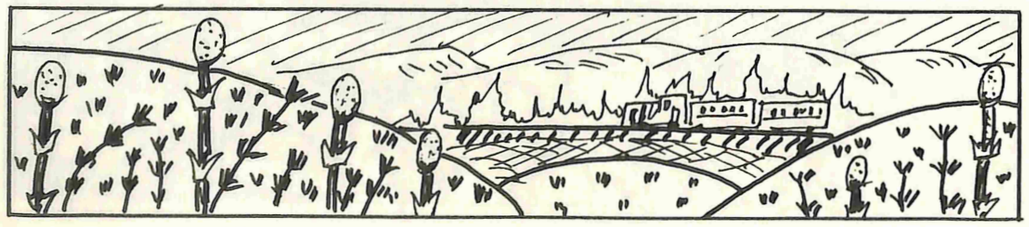
遠花火ネブタ祭か宵宮か
　津軽路今宵淡き彩どり

細枝の先に群咲く百日紅
　ピンクの花は盛りなりけり

久々に海辺通れば海苔摘みの
　人影多し春陽浴びつつ

大鯉よ暴れ跳ねるも網の中
　網先すでに水面離るる

満月を浮かべ流るる大黄河
　黄土高原に立哨の日ありき



短歌

今宵限り

岩田重美

子に残す戝なけれども心根を
　ひたすら詠みし歌集いく冊

何無くも吾れにサツキの古木あり
　鉢の手入れに心満ち足る

さりげなく出合いの態の友のごと
　妻とたのしむ飯店の食

目薬を差して寝ぬれば妻もまた
　真似ぬるがにして目薬差しぬ

無傷なる五体ベットに横たふは
　今宵限りぞ明日は手術日

短歌

晩秋

守井和夫

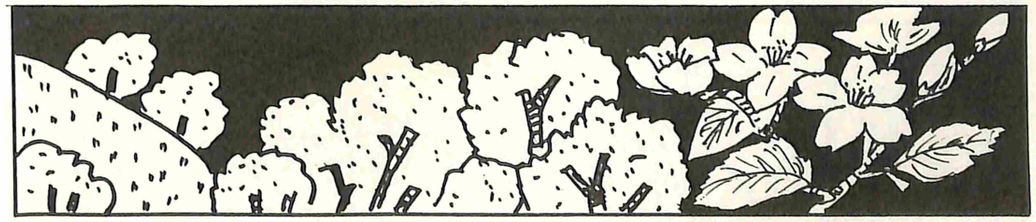
晩秋の朝トンボ飛ばんともがきおり
　地べたに聞ゆ　はばたきの音

収穫の朝線の陽ざしに猫の背へ
　話しかけてる　留守居の子の手

落葉掃く人もなかりき遊園地に
　子らは遊べり　落葉集めて

ゆさゆさと流れる水面に尾をひきて
　飛び立鳥の　烈しき一声

サクサクと霜踏み歩む学童らの
　雪が降ったと　はしゃぐ朝



川柳

ほろ酔い

櫛引八千代

アリバイをさげてほろ酔い帰宅する

そもそもの出合いは花の雨宿り

指切りの指は二つの顔を持ち

しようもない男愛した泣きボクロ

たった一度出合ったひとの子を宿す

川柳

里帰り

小山内トモ子

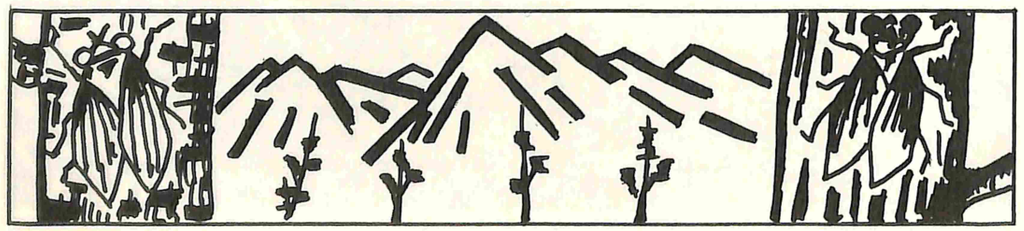
里帰りパンクするほどみやげ積む

良くもなく悪くもなくて暮らす日々

あなたの中に私だけの指定席

日焼けした肌がもどらぬ五十代

亭主も干してみたいよ土用干し



川柳

賽の河原有情

たかはしけん一

母情父情　賽の河原に　吾子の声

石を積む　婆に十九の　ままの兵

石積んで　母は臍の緒　結え直す

若後家を　あんずる巫子(いたこ)　男声

泣けるだけ泣いてあきらめ　踊の輪

川柳

白川哲子

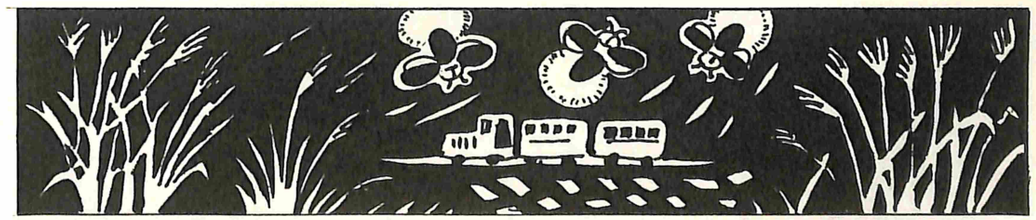
野苺をつんで遊んだ野が消えた

ひたすらに皇子誕生我願う

ささやかな暮しに負けぬ子が育つ

世に尽くし道を開いた母が居る

薬づけ生きたい為に今日も飲む



川柳

古日記

成田チセ

土こねて胸のつかえを焼いてみる

小さくも楽しこの家のかくれんぼ

紐ほどくように見ている古日記

明日の夢抱いて不足のない早寝

耳かしてうかつに乗った泥の舟

川柳

花の私語

てい女

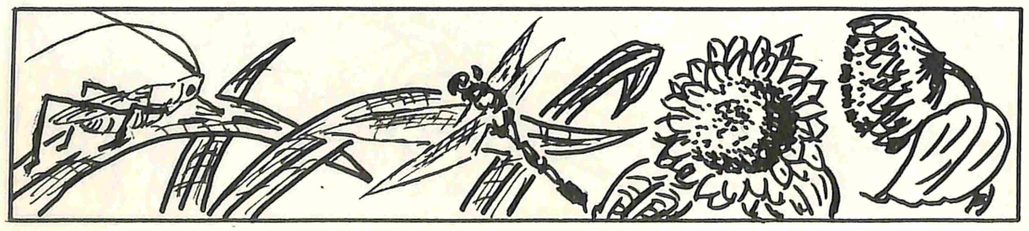
紐解けば太宰が見える文庫本

太宰碑に一ひらづつの花の私語

賽の河原亡母似地蔵にふと出逢ふ

亡母の愛終ることなく今も生き

炎天の祭終れば津軽秋



川柳

夏帽子

岩田　しげみ

子が親になって子と来る夏まつり

苦労して流す汗には無駄がない

夏帽子とばす青田のど真ん中

余生まだやさしい声の妻がいる

恋になりそうな優しい言葉うけ

川柳

盗み酒

鳴海　春光

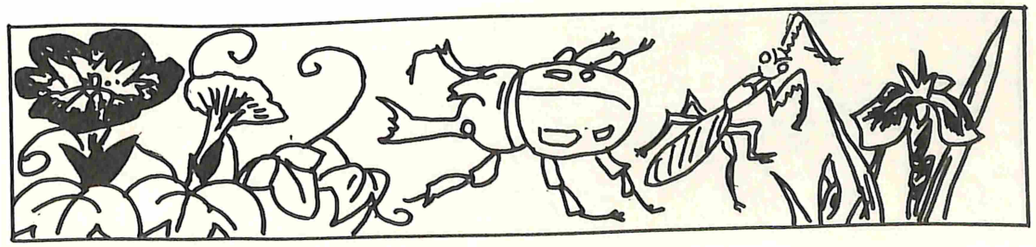
新しい風がほしくて趣味に生き

この人と歩幅そろえて古希となる

かやぶきの家についてる苔の意地

帰省して地酒を酌める友がいる

盗み酒平気でおれぬ赤い顔



川柳

恵みの土

中西　昭治

一生を野良着で通し終えた母

減反で恵みの土をもて余し

結論は聞くまい努力ほめてやり

首振れば油の切れた音がする

世のために尽したバトン子に渡す

川柳

〝私似で〟

奈尼　紗

私似で筋金一本欲しい子よ

知恵知識ほどのあかしか流行靴（はやりぐつ）

移り気を照らすか憎し満月は

夫も子も遠くにおいてひとりなり

いざよいに白々沈みかくれ宿

俳句

中ぐらい

高橋　けん一

子規虚子も　わしや知らんわい毛虫ゆく

下駄で来た　時代おくれのカンカン帽

ががんぼの　障子叩くやわしやひとり

世の中の　半分楽しところてん

新酒つぐ　まだ子を産める顔をして

鬼やんま　群れず男は生地捨て

藪からし　わが祖に馬喰ありと聞く

雪斜め　ひねくれ一茶と歩いてく

おでん食ふ　人の機嫌をとらぬ顔

数の子を　噛む賑はいや孫の数

俳句

盆の駅

坂田雅人

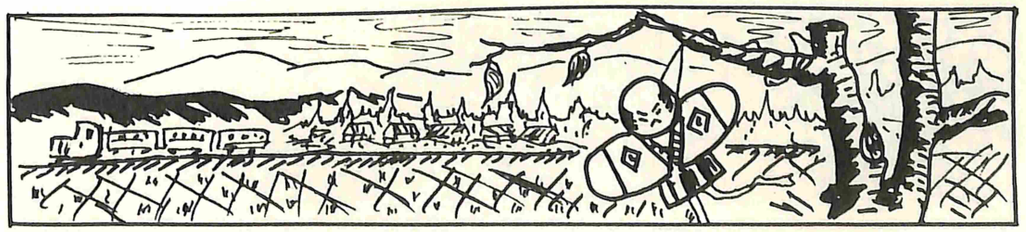
太宰碑や名残りの桜風に散り

苔花や歴史を秘めし斜陽館

母が児に指差し彼方夏の星

帰省客声かけ合うや盆の駅

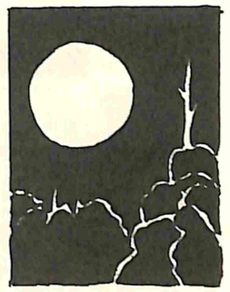
旅日記風鈴汽車と書く頁



金木町平成11年度公民館各種教室・サークル調べ

（平成11年４月現在）

名　称	講師・代表者名	会員数
童謡を歌う会	小山内　トシエ	１１０名
社交ダンスサークル	北沢　清一	８名
大正琴サークル	白川　セツ	６名
池坊華道サークル	白川　須美子	３名
小原流華道サークル	中谷　さつ	５名
さき織り教室	葛西　やえ子	１０名
園芸教室	白川　常正	２２名
短歌教室	花田　柾五郎	１５名
俳句教室	一戸　耕雨	２２名
書道教室	原田　兼治	１１名
陶工芸教室	大橋　昭彦	１６名
川柳の会	高橋　健一	１６名
金木健康ダンス	蝦名　昭逸	１１０名
金木合唱教室	蝦名　昭逸	２６名
３Ｂ体操	奈良　とし子	７名
風っ子サークル	松川　裕子	１０名
将棋教室	木村　治利	１８名
組紐教室	川口　良子	１０名
わがふるさとを探る会	木村　治利	１５名
料理教室	原田　勝子	２２名
凧づくり講習会	福長　勝義	申込・希望者
ねぶた囃子講習会	山田　精也	申込・希望者
つけもの教室	毛内　レツ	申込・希望者



旧暦に寄せる

原田萬治

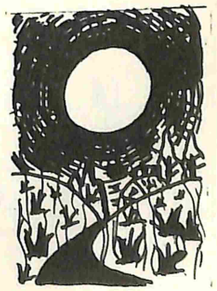
今から一〇年ぐらい前のことでありますが、五所川原市街の魚市場の店頭に、冬の海の産物のひとつとして、角又（つのまた）が、一皿いくらで売られていた。普通私達はツノマタフノリと呼んでいる。特別私の好物ではありませんが、とろろ汁のようにニャンコライスのかたちで食べると、ネバリけがあって美味しく食べられるものである。話に聞くと海岸の傍の岩礁や、大きな石の水際に叢生しているとのことを聞き及んだので、これはどこの海岸でも石がごろごろしている所を捜せばだれでも簡単に採れるものと思い、小泊村は折戸海岸（後でわかったのが）二月の上旬頃出かけていった。

盲、蛇に怖（お）じずの例えで、海に関する知識は全くないにも等しいものだから、こちら金木の方は無風状態でしたが、現場の折戸海岸では風が強くおまけに波が荒く、目の前にびっしり群生しているのを見ても手が出せない状態でした。その日はほんの少し採っただけで家路につきましたが、家へ帰って考えてみると、あれほど生え繁っていたのに指をくわえて逃げ帰ってきたのはどう考えても諦らめきれない。翌日まだ薄暗いうちに家族に内緒で家をとび出して、昨日収穫できなかった現場に来てみたら、驚いたことに昨日とはうって変って、波が静かでなんと海水面が四十センチ位下っているではないか。海には潮の干満があるとは知ってはいたが、これほど昨日と今日とは極端に違うものとは想像もつかなかった。それからは年に二、三回海にでかけたが、必らず潮の干潮の時刻をみはらかって採集に出かけたのである。しかし潮の水位が四十センチも下った状態に出会ったことがありませんでした。潮汐は天体の作用により、暦法にも関係あるのではと、その後も注意深く観察しておりましたところいろいろなことが分ってきた。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

今の小、中、高校の教育課程のなかで、どれだけ暦法について教え込んでいるかはわかりませんが、私達が教わってきたなかで、暦についてはそんなに詳しく教えられなかった気がする。それは、戦前、戦後と教育の混乱期に在学した世代であったからだろうが、潮の干満は月の引力によって起潮されるとしか、教え込まれなかったような気がしましが、このことは終りの方でもう一度考えることにして、暦法について考えていきたい。

◇　◇　◇　◇　◇　◇



暦と云えば大きく分けて、太陰暦と太陽暦の二つに分けられるが、わが国では、太陰暦を旧暦、太陽暦を新暦と称して用いられてきたが、太陰暦には、純枠太陰暦と、太陰太陽暦とがある。太陰とは月のことで、太陽とは字のごとくお日様のことである。太陰暦は月の満ち欠けを主にし、純枠太陰暦では、一年が大の月六ヵ月、小の月六ヵ月の三五四日で、太陽年に比べて約十一日も短かく、月の名称と季節とは一致しない。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

わが国で使われてきた旧暦は厳密に云えば太陰太陽暦のことで、十二ヵ月（平年）の年と、十三ヵ月の年（閏年）とを組み合せて、月の満ち欠けの他に、およその季節変化（二十四節気）も表すようにしたものである。日本に暦法が伝わったのは、欽明（きんめい）天皇の十四年（五五三）で、暦が実際に用いられたのは推古（スイコ）天皇の十二年（六〇四）だとされている。推古天皇と云えば日本で初めての女帝で、摂政（せっしょう）だった聖徳太子の時代である。古代とは、古代国家の創始で五世紀の終り頃、飛鳥時代から、鎌倉幕府以前のことを指しているようだが、日本の歴史のなかで、天智、天武と古代史のなかで一番面白い時代である。聖徳太子が摂政だからこの時期に実用に供されたのかも知れない。旧暦は二十四節気のほかに雑節も加えて明治の初めまで国も民も用いてきた。これにたいして新暦すなわち太陽暦は、ローマ法皇グレゴリオ十三世が、以前の暦を改暦したもので、現在この暦をグレオリオ暦という。この暦は三三〇〇年間に一日の差が生ずるだけであり、わが国で明治六年（一八七三）に採用されたが、今では世界のほとんどの国々でグレオリオ暦が採用されている。これを旧暦にたいして新暦と云ったのである。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

新暦を採用しても官公庁は別として、民間にはなかなか浸透せず、日常の生活は旧暦を主体とし、ことに明治時代に建立された基碑をみれば分るとおり、ほとんど旧暦を用いている。ことに津軽地方の田舎では戦前はもちろん、戦後も盆、正月は昭和三十年なかばまで、続けられて来たのであります。昭和三十年代と云えば敗戦の痛手の混乱期から立ち直り、経済成長期に差しかかり、ことに農家にとっては三十六年には農業基本法が制定され、これからの農家経営は米作一本から、畜産がもてはやされる時代に入ると、おだてられていた時代であった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

私達の村落でも、昔から培われてきて、使用し、利用されて来た旧暦は、敗戦により、すべての価値観が変っても、なお生き続けたのである。ことに教育の世界では、六、三、三制の学制が始まり、初めての中学生になり、新生日本の建設とかの意気込みで、旧暦を主体にする生活習慣は追放しなければならないとの気運があったので、旧暦そのものから脱却しなければ世の中の進歩に遅れをとり、ことに迷信と結びつく素地もあるようで、とにかく旧暦は考えないようにしたのである。

◇　◇　◇　◇　◇　◇